

赤城山におけるニホンジカの個体数調整（委託事業）について

財団法人自然環境研究センター 青木 豊

1. 目的

近年、赤城山において、ニホンジカに起因するニッコウキスゲに代表される植物の衰退、交通事故の発生といった事象が確認されている。この赤城山における事象の解決を目指した計画的個体数調整を実施することにより、群馬県における「特定鳥獣保護管理計画に基づく数の調整」の許可区分の適切な運用方法を検討し、群馬県におけるニホンジカ特定鳥獣保護管理計画の密度管理の重要な手段の一つとしての位置づけを明確にすることを目的とした。

2. 対象地域

対象地域は、赤城山鳥獣保護区内（特別保護地区を含む地域）とし、隣接の花見が原鳥獣保護区、東大河原鳥獣保護区は含まないものとした。

3. 対策概要

対象地域が鳥獣保護区でありかつ観光地であるため、猟犬を使用した場合には他の鳥獣への影響を避けられないこと及び猟銃を使用した捕獲では、安全の確保が困難となるため、くくりわなによりニホンジカの捕獲を行った。また、ツキノワグマの生息地でもあることから錯誤捕獲に留意した。さらに、ニホンジカを捕獲したのちには動物愛護の観点から、なるべく苦痛を与えない方法で止め刺しを行うこととした。

4. 事業の特徴

猟友会が行う巻き狩りは、狩猟の永続性という視点からは非常に優れた猟法であるが、個体数調整においては、警戒心の高い個体（スレ個体）を作り出してしまい、捕獲効率を高めることができない。そこで、くくりわなによる効率的な捕獲を目指した。このため、猟友会に任せきりにせず、わなの設置や移動などを工夫しながら行う必要があり、捕獲コーディネーターを配置することで、科学的な検証を行いながら捕獲を行った。

5. 捕獲結果

(1) 下仁田町

赤城山での捕獲と平行して実施した下仁田町での捕獲結果を表1に示した。この期間中ののべわな数は、3種×5基×102日=のべ1530基となる。ニホンジカの捕獲効率は、1頭/1530TN=0.0007であった。

表1 神津牧場におけるニホンジカの捕獲結果

| 個体 | 捕獲年月日 | わなタイプ | 捕獲個体 |
|----|------------|--------|------|
| 1 | 2009/08/11 | 巻きバネ式2 | イノシシ |
| 2 | 2009/08/12 | 巻きバネ式1 | イノシシ |
| 3 | 2009/10/06 | 猟友会式 | シカ |
| 4 | 2009/10/08 | 猟友会式 | シカ |
| 5 | 2009/10/15 | 猟友会式 | シカ |
| 6 | 2009/11/04 | 猟友会式 | シカ |
| 7 | 2009/11/08 | ねじりばね式 | シカ |

(2) 赤城山

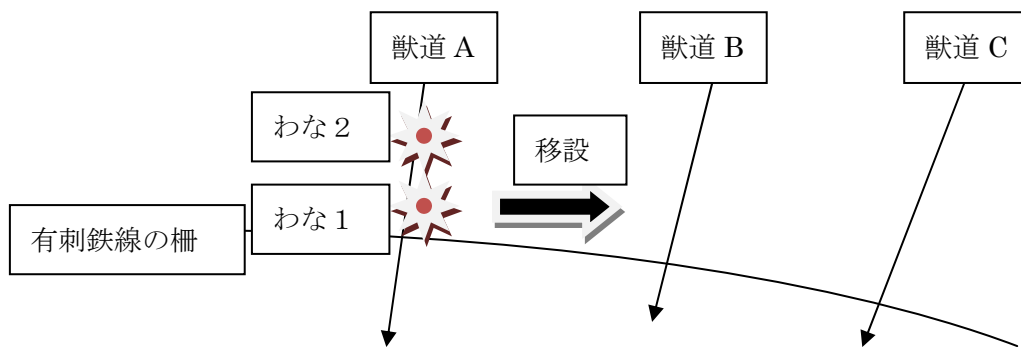
① 生息密度調査

事業効果を測定するための指標として、糞粒法による生息密度調査等を実施した。

② 個体数調整

個体数調整では、計画にしたがって効率的に捕獲を行うことを目的としており、通常の狩猟(シカ)で行われる「巻き狩り」は、持続的な捕獲ができないと考えられる。「巻き狩り」ではシカの群に対する警戒心の植え付けが行われ、いわゆる「スレ個体」を増加させることに起因していると考えられる。このため、本計画では効率的なくくりわなを選択し、継続的な捕獲が行えるように考慮する。また、事業実施地域が鳥獣保護区内であり、かつ観光地でもあることから捕獲にあたっては、静穏の保持に考慮しつつ地域住民に心理的抵抗感が生じないよう努める。

③ 捕獲作業～捕獲効率を低下させない工夫～



④ 捕獲効率

表 2 各期間の捕獲効率

| 期間 | 設置日数 | わな数 | のべ数 | 捕獲数 | 捕獲効率 |
|-----|------|-----|-----|-----|--------|
| 第1期 | 11 | 20 | 220 | 8 | 0.0364 |
| 第2期 | 10 | 30 | 300 | 9 | 0.0300 |
| 第3期 | 2 | 19 | 38 | 1 | 0.0263 |
| 合計 | 23 | — | 558 | 18 | 0.0323 |

その結果、第1期が0.0364と最も高く、第2期が0.0300、第3期が0.0263と次第に下がる傾向が見られた。このことから、わなに対する警戒心が高まっていることが予想された。しかしながら、赤城山でのシカの分布状況から考えると10月後半からは山頂部分から移動していることも予想されること、期ごとにわなの設置場所を大きく変更したことなどを考慮すると、わなに対する警戒心が高まったとは一概に断定することはできない。全期間での捕獲効率は、0.0323となり、下仁田での捕獲効率0.0020と比較すると、16.15倍の捕獲効率であった。

6. 今後の課題

継続的な捕獲とモニタリングの実施が必要。他地域からの流入は防げないので、捕獲を中断すれば、生息密度は回復してしまう。予算と人材の確保は、重要な課題となる。